

亜麻耕作に賭ける

続いて登場したのが亜麻作りです。開拓使では外国人技師から亜麻が有用作物と聞き、明治八年には札幌にあった官園にアメリカ種の亜麻をまいていきます。屯田兵でも、

明治十三年に開拓使長官黒田清隆がロシアから持ち帰った亜麻を試作させましたが、この時は製麻の見通しもなく、倉庫に積んでいただけでした。明治十五年、フランスから亜麻紡績を学んで帰国した内務省技師の吉田健作がこれを見て、製麻工業を起こすべきと力説。ベルギーから亜麻耕作の指導者を招いて、明治二十年五月に北海道製麻株式会社を設立しました。

琴似でも明治二十年から本格的な栽培にかかり、二十四年にはすでに約五十八畝の亜麻耕作が行われるようになりました。

当時亜麻耕作が盛大になった理由は、土地が耕作に適し収益の多いことにもよりますが、亜麻は会社側で高値で作付契約した上、種子を貸すという方法だったため収入が安定していたといえます。ま

た、明治二十三年に新琴似製線所ができ、明治三十八年ころには琴似といえは亜麻の主産地といわれるようになりました。

北海道の亜麻耕作面積は明治二十年に約二十畝であったものが、二十七年には五十倍の約千畝、大正三年の第一次世界大戦により一万畝を突破するという躍進振りでした。この大戦を契機に道内各地で製麻工場が乱立する状態になり、琴似でも北八軒に日本製麻株式会社の工場ができ、亜麻耕作に拍車がかかりました。しかし、大戦後の経済不況で亜麻の価格は暴落し、急速に

姿を消していききました。

また、日露戦争で、開拓当初は問題にされなかった燕麦が日本軍の軍馬のえさとして買い上げられるようになり、明治末期には燕麦も耕作されるようになったのです。

役場の移転と試験場の誘致

日露戦争が終わり琴似屯田の後備役も満期となり、明治三十九年、篠路村の篠路兵村の全部を琴似屯田兵村の管下に編入し、現在の琴似小学校（琴似二一七）の場所に琴似村役場が置かれました。その

建物は屯田兵時代から使われていたもので傷みが激しく、何度か移転改築が検討されました。しかし、新琴似を含め三つの兵村が一つの自治村に含まれたため、役場の位置をめぐって、お互いに譲らず、分村願いが出されるといいう事態にまで発展してしまいました。三つの兵村はおのおの出身地も入地年代も違い、気質的にも相当の隔たりがある上、各兵村にはそれぞれの公有財産があったので、利害関係も一致しなかったからです。

四代目村長となった清水涼は、大局的見地から、行政の中心は交通機関の中心に置くべきであると考え、現在の八軒まちづくりセンター（八軒一西一）の場所に移転を提案。大正九年十月に新庁舎が完成し、長い間の懸案を見事に解決することができたのです。



▶日本製麻株式会社琴似繊維工場



▶琴似村役場



▶大正九年琴似村役場落成式に集まった村会議員。前列中央が清水村長



▶大正十四年琴似村八軒に移転した北海道農事試験場